

精密総合健診(人間ドック)

動 向

時代とともに人間ドックは、単に疾患探しから、QOLに主眼を置いた「がんを中心とした疾患の早期発見」と「生活習慣病を中心とした疾患のハイリスクの発見と対策」へと変遷してきており、大きな成果をあげてきた。急速な高齢化を迎える「生きがいを持ち、すこやかに老いる」ことが万人の望みであり、この点を踏まえて、一次予防に加え二次予防である疾患の予知・予防による健康増進への方策が不可欠である。生活習慣病の予防は、受診者自らが健康的な生活習慣を確立することであるが、それを支援する体制づくりが健診機関として重要である。

個人レベルにおける健康意識は高まりつつあるが、長引く経済不況の影響を受け、ここ数年間ドック受診者は減少傾向にあり、受診者の負担を軽減するためにも、社会的経済的なバックアップが必要であり、健康保険組合をはじめとする各種団体と折衝し、より良い健康管理体制を築いていくことが重要である。

結 果

平成12年度の人間ドックの受診者数は、男性5,446名、女性3,644名で、合計9,090名と昨年より219名減少した。男性は128名減、女性は91名減である。

平均年齢は男性 51.8 ± 9.5 歳(22歳から87歳)、女性 51.6 ± 9.0 歳(21歳から85歳)であり、昨年とほぼ同じ年齢構成となっている。男女別内訳を見ると、女性の初回受診が28.9%で、男性が21.6%、5年以上継続が男性で41.8%、女性が31.7%であることから、女性の継続率を高めることができ、受診者増に貢献する可能性がある。県内の基幹産業の不振を反映し、経費削減の影響を強く受け、福利厚生の重要な柱である人間ドックを中止し、労働安全衛生法で定められた法定検診へ移行する例が目立つ。現場においては、検診項目、検診精度、生活習慣病への取り組みなど肌理の細かい個人対応をおこなって内部努力につとめているが、検診料金体系、検診項目の抜本的な見直しが行われないと、他検診施設との差別化が難しいと思われる。

総合判定区分で異常なし、心配なし、要経過観察の3群をあわせても、男性8.1%、女性15.3%で、日常生活の見直しが要求されるものは、男性19.8%、女性17.4%とほぼ同一の傾向を示す。

平成12年のがん発見の内訳は、食道がん1名、胃がん8名、肺がん2名、腎臓がん1名、乳がん4名、子宮頸部がん1名、子宮体部がん2名、前立腺がん3名の合計22名の新規発見があった。これは、全人間ドック受診者のうち0.24%の人にあたり、最近数年の新規発見率はおおむね一定している。平成8年から導入されたヘリカルCTの成果が着々と示され、早期の肺がんの発見が、平成7年度0、8年度3、9年度4、10年度6、11年度6と安定して発見された。本年は新規発見数が少なかったが、今後もこの傾向が続くかどうかは、しばらく経過を見守る必要がある。前立腺がん検診がオプションで加わってから、3名(50歳台、60歳台、70歳台)の発見は、検査を開始してからほぼ一定の結果がでている。前立腺がんは、加齢とともに増加するが、若年で悪性度の高いがんをいかに早期に発見できるかがこの検診の肝要な点であろう。

第42回人間ドック学会の全国集計の結果によると、一泊人間ドック605施設中583、一日人間ドック266施設中263の回答の結果、健康度の悪化傾向が目立つと結論づけている。

上記集計におけるがんの発見率についてみると、胃以外の臓器のがん発見率が増え、男性では直腸がん、前立腺がんが顕著に増加、女性では、乳がん、甲状腺がんなどが増加傾向にある。また早期胃がん76.9%、早期大腸がん74.9%となっており、治るがんの早期発見のためにはがん検診の重要性を強調しなくてはいけない。さきの人間ドック学会の全国集計をみると循環器代謝系を見ると、生活習慣病関連6項目の検査では、すべてに異常がなかった健常者は、1984年の30%から14.8%に減少した。また前回指摘されていた地域差は見られなくなった。高コレステロール、肥満が増加傾向にあり、特に女性の加齢とともに高コレステロールの増加が目立つ。男性では、若年者から肝機能異常、高コレステロール、高中性脂肪、肥満が目立つことから加齢よりも生活習慣の影響が反映している。

当人間ドックの結果もほぼこれらと軌を同一にするが、脂質の動きを見ると、総コレステロールの上昇は続いているが、特に循環器疾患の惹起因子であるLDLコレステロールも上昇しており、LDL>140mg/dl以上は、男性1,564名、女性1,087名もみられ今後、循環器疾患増加につながるのか観察が必要である。

関係の集計表は152～156頁に掲載
